平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について

本 中 真*

On the Design and Composition of TOH-IN Garden which was Made in 8c.
and was Excavated at South-east Corner of Nara Palace Site.

Makoto MOTNAKA

摘要：小論は、発掘調査によって判明した平城宮東院庭園の意匠と工法の検討を行い、他の遺跡庭園を例証しつつ古代庭園の一連の系譜の中に位置づけようと試みるものである。

1. 序、研究の目的と方法

この小論は、平城宮東南隅において発見された平城宮東院庭園をとりあげ、その意匠と工法の系譜についてひとつの仮説を提案するものである。まず最初に東院庭園の意匠と工法における特徴を洗いだし、他の古代遺跡庭園の事例を渉猟する中で類例を探索する。そして古代庭園の中における東院庭園の位置づけを明らかにする。さらにこれらの諸例を相互に関連づけ、一連の系譜の中に系統付けることを試みる。

2. 平城宮東院庭園の意匠、工法に見られる特徴

1) 平城宮東院庭園の概要

東院庭園は特別史跡平城宮跡の東張出部東南隅において発見された奈良時代の庭園である(図-1)。この東張出部は『続日本紀』に散見する「東院」に比定され、か

写真-1 平城宮東院庭園(東院-A)

図-1 平城宮東院庭園発掘遺構図(右; 東院-A, 左; 東院-B)

写真-2 東院-B

*奈良国立文化財研究所

図-3 推定小墾田宮園池遺構図

図-4 飛鳥島庄園池遺構図

図-5 郡山遺跡園池遺構図

かる庭園の名称もここに由来する。1968年の平城宮跡第44次調査に端を発して、第99次（1977年）、第120次（1980年）の各調査によって園池の全体像が判明した。

園池は北から南へ下がる緩傾斜地の縁辺部に位置し、小規模な谷地形を利用して造られている。東と南は平城宮の外郭を画する築地大垣に面し、北と西は掘立柱塀で閉塞される面積約6,600～7,000㎡の区画内に位置する。

東院庭園は奈良時代全般を通じて存続するが、奈良時代半ばに大規模な改修工事を受けている（図-1）。前半の園池は養老年間（717～723）から天平初年（729）に至る期間に造営され、天平勝宝年間（749～756）以降に改修工事が実施された後、後半の園池が奈良時代末まで存続する。

^{1),2)} 前半の園池のうち、当初のものは一部玉石積擁壁で汀線を処理し、ほどなく直径約30cmの玉石を汀線部分に幅約2～3mの帯状に敷き詰めて改修している。³⁾ 後半の園池ではこれを大がかりに埋めて全体を礎敷とする。この小論では前半の園池を「東院-A」、後半の園池を「東院-B」と呼び、以下の叙述を進めることとする。

2) 平城宮東院庭園の特徴

(1) 石積擁壁

東院-Aの特徴の第一は、園池西岸と南岸に遺存した石積擁壁の基底部と、その据え付け掘形である（図-1）。擁壁の基底部は遺存の良好な箇所では玉石2～3石をほぼ垂直に積み上げるが、大半は基底部の玉石1石ないしはその抜取り痕跡を残すのみである。^{1),2)} しかし擁壁の据え付け掘形が、西岸では延長約3m遺存する玉石列の西方約1.5mの位置で南北に、南岸では同じく1石のみ遺存する玉石に沿ってほぼ東西にそれぞれ直線状に連続し、西岸と南岸がもともと3～4段の玉石積擁壁を形成していたことを示す。しかも注目すべき点は、西岸中央で池中に突出する出島基部の下層においても同様の掘形を検出したため、出島が園池開削当初には存在せず、その後まもなく実施された改修工事の結果造成されたものとみられることである。改修の結果北岸と南岸は石積擁壁を

図-2 東院-A
西岸部断面模式図

部分的に埋めながら池中に向かって緩やかな下り勾配で造成され、この上に汀線をなす直径約30cmの玉石が張られたのである。図-2はこの工法を断面模式図に示したものである。西岸の擁壁据え付け掘形は第120次調査区の北辺で東に折れ曲がる様相を呈するため、北岸にも同様の石積擁壁が築かれていた可能性がある。また第120次調査区東方の第44次調査区は東院-Bの段階で調査を終了しており、下層の東院-Aの園池にまで調査が及んでいない。⁴⁾ したがって東院-Aでは園池南半部の西岸はもとより、南、北のいずれの護岸も直線状の石積擁壁であった可能性も否定できない。西岸のさらに西約5～6mの位置には、東院庭園地区の西を限る石組溝や掘立柱南北塀が存在するため、上記の石積擁壁は塀などの閉塞施設との位置関係から西岸汀線の処理方法としてやむを得ず考案されたとも考えられるのだが、東院-A成立以前の他の園池の中に同様のデザインを見いだす時、それは区画に制約されて考案された単なる工法と見るよりも、当時の園池護岸デザインの一系譜と捉えるほうがきわめて自然であることに気付く。

類似例として挙げるのは、推定推古朝小墾田宮の園池である（図-3）。⁵⁾ 推古天皇は豊浦宮に即位の後、推古11（603）年に小墾田宮を新たに造営して遷宮した。その推定地として有力視されていた甘樫丘の西北方、「古宮」という小字名の残る一帯を1973年に発掘調査したところ、6×3間の掘立柱建物東西棟とその南に広がる広場の中央に直径2～3m、深さ約50cmの不正円形の小さな園池と、それに連続するS字状の幅約20cmの石組溝とを検出した。園池の埋土からは7世紀前半に属する土師器杯の完形品が数点出土しているため、この園池が推古朝の時期に属するものであることは疑いない。園池

は池底部の張石を欠き、東西両岸と北岸は緩やかな勾配の玉石敷汀線に仕上げているが、南岸はほぼ垂直に立ち上がる玉石積擁壁である。つまり東院-Aの当初の西岸と同じ工法なのである。厳密には、小墾田宮の場合が園池の西南隅部から連続する玉石溝の側石と園池南岸の玉石積擁壁とが一体的に造られているのに対し、東院-Aの場合は一旦西岸の玉石積擁壁を造った後、南北両岸から部分的に埋めるように緩やかな勾配で玉石を敷いた汀線に改修している点が異なっている。もちろん規模の点でも両者は大きく異なるのだが、仕上がり形態の面ではきわめて類似しており、東院-Aの西岸等にみられる園池汀線のデザインおよび工法は、古く7世紀前半にまで遡ることがわかる。

(2) 逆L字形プラン

東院-Aの特徴の第二は、東院-Bに比較してきわめて平面形が単調なことである。前述のように、東院-A当初には園池南半部の西岸、南岸、北岸が直線状の石積擁壁であった可能性があり、東岸にも部分的に直線状の汀線がみられることから、全体の形状は直線を基本とする逆L字形である。東院-Bは、この逆L字形プランを持つ東院-Aの汀線に湾曲部を随所に付加して改修成立したものであることが推定される(図-6)。奈良時代以前の園池遺構には方形プランを持つものがいくつか存在する。

飛鳥島庄で発見された蘇我馬子が造営したとも考えられている7世紀前半に属する方形池がその好例である(図-4)。⁶⁾ この方形池は一辺42m、深さ1.5mあり、汀線が直径約50~60cmもの巨大な自然石を随所に用いた擁壁であるなど、一見プールを思わせるような形態を持つ。しかし池東南隅の底部には井戸が存在し、池の底部は直径約30cmの玉石を全面に張って水の浄化を図るなど、この池が単なる灌漑池ではなく園池であることを物語る。⁷⁾

また、2つ目の類型遺構として飛鳥石神遺跡の方形池(写真-3)⁸⁾と、宮城県仙台市の郡山遺跡で発見された方形池(図-5)⁹⁾とを挙げることができる。前者は斉明天皇(655~661)の時代に迎賓館として機能した建物群の中庭に設けられた一辺約6m、深さ約80cmの方形池で、汀線は直径約50~80cmの自然石を2~3段積とし、池底は化粧と水の浄化を目的として拳大の礫を全面に敷き詰める。また後者は東北地方の城柵遺跡において発見された7世紀末~8世紀初頭の石組方形池で、一辺約4m、深さ約1.1mと石神遺跡の方形池と規模の上で類似している。

これらの方形池の事例は、東院-Aの平面形が逆L字形を基本としつつ部分的にデフォルメを加えて全体の平面形を整えていることとまったく無関係ではない。東院-Aは、7世紀に先行する方形池をベースに形態が決められたといっても過言ではなからう。

東院庭園以外の奈良時代の庭園遺構の中で、汀線が直線状の石積擁壁の護岸を持つ事例として、平城京左京二

写真-3 飛鳥石神遺跡の方形園池遺構

写真-4 平城京左京二条二坊九坪園池遺構

図-6 東院庭園の変容パターン

条二坊九坪において検出した園池遺構を挙げることができる(写真-4)。¹⁰⁾ 直径約30cmの自然石を直線状に2段に積んで護岸とし、池水浄化のために拳大の円礫を底部に敷く。この園池は、正倉院文書等に写経所として登場する法華寺嶋院に関連するものと推定されている。

以上のように、東院庭園だけでなく8世紀の庭園遺構の中には7世紀の石積擁壁を伴う方形池の系譜の延長線上に位置づけられるものがいくつか存在するのである。

(3) 州浜の登場

東院-Aから東院-Bへの改修における特徴は、やはり汀線が直線を主体とする玉石護岸から複雑に入り組んだ曲線を主体とする州浜に改められることである。この変化の背景として、まず古墳の周濠を改修して園池とするという行為が、当時かなり頻繁に行われていたことについてふれておかねばなるまい。

平城宮跡北辺中央部に位置する市庭古墳は直径約100mの円形マウンドとして遺存するが、発掘調査によって、全長約250mもある巨大な前方後円墳を平城宮造営とともに前方部を削平し、周濠を埋めていることが判明した。

¹¹⁾ そして後円部外周西北部の外濠は、奈良時代に約3.4mの深さの約90%近くを埋め、その上に礫を敷いて水深

のきわめて浅い園池として再利用していることが判明した(図-8、写真-5)。¹²⁾古墳の周濠と墳丘は、古墳本来の機能が忘れ去られた時に、水と山を象徴する材料として優れて造園的な取り扱いがなされようとしたのである。

平城京左京一条三坊十五・十六坪の調査で明らかとなった平塚2号墳も同様の例である。¹³⁾この宅地中央の北よりに南北に並列する東西棟掘立柱建物の間隙を縫って、西北から東南へと流れる蛇行素掘溝が宅地の東南部の園池へと連続している。しかもこの園池は、平塚2号墳の周濠を利用して墳丘斜面に残る葺石に奈良時代に新たに景石を補充して汀線処理していたのである(写真-6)。

また、平城宮北方の猫塚古墳の周濠も園池に再利用されていることが判明している(図-8)。¹⁴⁾猫塚古墳で興味深いことは、この古墳が平城宮北方の禁苑である松林苑の中にとりこまれているということ、墳丘・周濠・建物がセットで発見されていることである。

こうした律令制下における古墳の造園的な再利用はかなり頻繁に行われたものと想定されるが、以下にみる杉山古墳においてはやや特殊な性格を持つものとして注目されなければならない。

結論からいえば、杉山古墳の墳丘と周濠は寺院の境内地に取り込まれて墳墓以外の機能を担うものとして残されて来た可能性が高いということである。杉山古墳は平城京左京六条四坊七坪、藤原京大官大寺の後身とされる大安寺の境内地北端に位置する古墳である。全長約120mの前方後円墳で、条坊の1坪内に納まっている。調査報告によると、主体部想定位置である後円部中心を墳頂から約4m掘り下げたが埋葬施設を発見することができず、代わりに墳丘内部から意味不明の粘土塊を3箇所において発見したという^{15),16)}。また盗掘の痕跡も認められ

なかったという。『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』¹⁸⁾には杉山古墳を指して「合寺院地壹拾伍坊……一坊池并岳…」と記し、この古墳が平城京造営に伴って墳丘と周濠を含めて大安寺境内に残されたことは疑いない。また、『続日本紀』和銅2(709)年10月条には造平城京司に発令された勅として、平城京造営に際して発見された墳墓の手厚い事後処理方法について戒めている。森浩一は、両記事と杉山古墳の埋葬施設が発見されないという調査結果とを関連付け、杉山古墳の墳丘を墳墓以外の目的に利用するためにわざわざ埋葬施設を他所へ移設したのではないかと推定する。¹⁷⁾出土した粘土塊は埋葬施設を他所へ移した際に生じた何らかの痕跡ではないかと解釈する。そして同時に平城京造営に際して杉山古墳の墳丘を都市施設として一坊分を計画的に割り当てる必要があったとし、その理由として市庭古墳後円部、垂仁天皇陵(宝来山)と並んで平城京造営時の「三山」の機能を担わされていたのだという大胆な推論を展開するのである(図-7)。「三山」とは、もちろん『続日本紀』和銅元(708)年2月条に記す有名な平城遷都の詔の一節「方今平城之地、四禽叶圖。三山作鎮。」の「三山」を指す。この記事は平城京造営に先立って四神相応の地として宮都を選地する際に、藤原京三山(香具山、畝傍山、耳成山)と同様に平城京においても東、北、西の三方を山に囲まれていることが地形選択の条件になったことを示す。従来平城京の三山は東の春日連山、北の奈良山丘陵、西の生駒矢田丘陵に比定されてきたが、森の推論は平城京の三山にも漠然とした山岳地帯や丘陵部ではなく、藤原京のそれと同様に3つの独立丘ないしは独立峰が充てられてしかるべきだという考え方に

図-7 平城京の三山 (森浩一説)

写真-5 市庭古墳周濠部の園池

写真-6 平城京左京一条三坊十五、十六坪園池遺構

図-8 市庭古墳・松林苑・猫塚古墳

基本的には立脚している。¹⁹⁾そして、森は上記の3つの古墳の墳丘を三山に比定したのである。この推論はきわめて興味深い、しかし論理の展開に問題が無いわけではない。すなわち、杉山古墳の造営年代は5世紀後半とされているから、既調査区の位置する後円部中心部に必ずしも埋葬施設が存在するとは限らず、中軸線をはずれた調査区外に今も埋葬施設が埋まっている可能性もあるのである。早計な結論は差し控えなければならないが、なおこれらの三山説は、古墳の墳丘が地形を選別ないしは判別するための一種のランドマークの機能さえ担わされていたことを推定するという点できわめて示唆に富むものである。

さて、杉山古墳周濠部はその後の発掘調査^{20), 21)}によって8世紀を通じて池沼を呈して遺存していたことが判明している。いずれの調査区においても汀線を石で化粧した痕跡は認められなかったが、少なくとも水面は奈良時代全般を通じて遺存したわけである。調査区が狭隘なため、今後の調査によって部分的にでも石敷や景石を検出できる可能性は残されており、即座に園池の可能性を否定するわけにはいかない。森も指摘するように、杉山古墳が平城京造営に際して積極的に都城の計画プランに組み込まれたのだとしたら、その後の利用方法は墳丘と周濠の庭園の利用に限定されるのではあるまいか。²²⁾

以上のように発掘調査の諸成果からは、前時代の遺物である古墳の墳丘と周濠が、造園的な再利用のもとに蘇生がはかられるケースを頻繁に認めることができる。そして注目すべき点は、周濠を埋めて比較的浅い園池に造り変え、葦石を一部利用しながらもやや細かな玉石や礫を敷いて州浜状に仕上げていることなどが特徴的である。すなわち東院-Bに見られる礫敷汀線は、古墳の再利用に伴って登場した園池の汀線処理手法の影響とも考えられるのである。さらに大胆な憶測が許されるとするなら、東院-Bにおいて初めて庭園の州浜状汀線は確立するのだといえるだろう。古墳を再利用することによって園池を造るというまさに借りをベースとした作庭行為は、いまや厳然として存在した庭園の改修工事、つまり東院-Bが出現する中で幾多の試験結果の集大成として確立する。それはその後の園池作庭の根幹をも成す技法として、東院-Bにおいてはじめて出発したのだといえるであろう。9世紀の賀陽親王邸宅跡、およびその後身である高陽院の園池遺構、そして11, 12世紀に登場する鳥羽殿²³⁾をはじめとする多くの離宮や浄土寺院伽藍²⁴⁾に伴う園池は、すべてこの州浜状汀線を基本としている。州浜が東院-Bにおいて登場するという事は、つまり8世紀の庭園がやがて日本化していく端緒がまさしく東院-Bにおいて現われていることを端的に物語っているのである。

(4) 朝鮮慶州雁鴨池との関連

東院-Bで指摘されなければならないことは、朝鮮慶州に遺存する雁鴨池との関連である。雁鴨池は7世紀後半の新羅文武王の頃に造営された宮殿の園池である。²⁵⁾

この園池の形状は、臨海殿の建っている園池の西岸と南岸が建物の基壇をかねて直角に折れ曲がる切石積擁壁であるのに対し、園池の東岸と北岸は曲線を主体とする切石積擁壁の上に随所に景石を据えて自然の汀線を象徴するデザインとなっている。²⁶⁾図-9に示すように方位と規模こそ異なるが、改修後の東院-Bと平面形がきわめて類似しており、東院-Bはまさしく雁鴨池のミニチュアといえるであろう。両者の比率は約1:31である。

すなわち、東院-AからBへの改修にあたっては、雁鴨池を念頭におきつつ、この模倣ないしは縮模再現を作庭方針の根幹に据えていたことが推定されるのである。

(5) 平城京左京三条二坊宮跡庭園との関係

宮跡庭園は平城宮東院庭園の南方約600mの位置に存在し、全長約55m、幅員約11mの全体を玉石で固めた曲池である。報文²⁷⁾によると、園池造成に伴う整地土層から出土した土器の年代によって、園池は天平末年(748)から天平勝宝年間(749~756)に造られたとする。まさしく東院庭園が東院-Aから東院-Bへ改修されると軌を同じくして宮跡庭園が登場するのである。また同報文は、出土軒瓦に平城宮出土軒瓦と同范型式のものが多くことから、この庭園が貴族の邸宅のものと考えられるよりは平城宮の離宮的施設と解釈したほうが妥当だとする。すなわち宮跡庭園は平城宮東院庭園と基本的に同一の機能を持っていたものと想像され、外国使節の迎賓など国家的な儀式・宴遊を行うための庭園施設であったということである。憶測をたくましくするなら、天平勝宝年間に宮跡庭園が新たに造営されると同時に東院庭園が玉石護岸から州浜状汀線に改められ、まったくデザインの異なる庭園を一方は平城宮内に、他方は平城宮の離宮的施設の中にそれぞれ実現したとも解釈できるのである。そして両者は迎賓等の儀式・宴遊に際して適宜使い分けられたのではないだろうか。これを明確に示す史料はないが、

図-9 朝鮮慶州雁鴨池平面模式図

両者の造営および改修年代が奇しくも一致していることを考えれば、あながち無謀な推定でもなかろう。

3. 結論、古代庭園の意匠・工法の系譜

以上の諸事例を系譜にまとめて図示したものが図-10である。見られるように、平城宮東院庭園は、当初7世紀の方形池や推定推古朝小墾田宮の園池の系譜をひきながら直線的な石積擁壁や玉石敷汀線を主体として造営されるが、やがて改修期には朝鮮雁鴨池の平面プランを念頭に置きつつも、それまでに定着し一般化していた古墳の周濠部を再利用する園池の造作手法を援用して、曲折する「州浜」汀線を主体とするデザインに変更が加えられるのである。そして東院庭園において確立された「州浜」の技法は、平安時代庭園の汀線処理技法として永く援用されて行くのである。

図-10

註および参考文献

- 1) 昭和54年度平城宮跡発掘調査概報：奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）：1980
- 2) 奈文研年報1980：奈文研：1980
- 3) 奈文研年報1977：奈文研：1977
- 4) 奈文研年報1968：奈文研：1968
- 5) 飛鳥・藤原宮発掘調査報告(学報27)：奈文研：1976
- 6) 嶋宮伝承地(昭和46~48年度発掘調査概報)：奈良県教育委員会：1974
- 7) 秋山日出雄：飛鳥島庄の苑池遺構：仏教芸術109：1978
- 8) 飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報18：奈文研：1990

- 9) 郡山遺跡X(平成元年度発掘調査概報, 仙台市文化財調査報告書第133集)：仙台市教育委員会：1990
- 10) 昭和55年度平城宮跡発掘調査概報：奈文研：1981
- 11) 平城宮発掘調査報告Ⅶ(学報26)：奈文研：1976
- 12) 平城宮北辺地域発掘調査報告書：奈文研：1981
- 13) 平城宮発掘調査報告Ⅵ(学報23)：奈文研：1975
- 14) 奈良県遺跡調査概報1983：奈良県教育委員会：1983
- 15) 末永雅雄：奈良市大安寺杉山古墳：日本考古学年報7：日本考古学協会：1955
- 16) 小島俊次：奈良県奈良市杉山古墳：日本考古学年報8：日本考古学協会：1954
- 17) 森 浩一：前方後円墳と平城京の三山：樞考研論集第9：奈良県立橿原考古学研究所：吉川弘文館：1988
- 18) 竹内理三編：寧楽遺文：東京堂出版：1962
- 19) 金子裕之：平城宮跡：月刊文化財(昭58-8号)：文化庁：1983
- 20) 亀田博：大安寺旧境内発掘調査概報(76-2次調査)：奈良県遺跡調査概報(1976年度)：樞考研：1977
- 21) 森下恵介：大安寺旧境内の調査(81-5次調査)：奈良市埋蔵文化財調査報告書(昭和56年度)：奈良市教育委員会：1982
- 22) 1990,1991年度の奈良市教育委員会による調査でも、園池の痕跡を示す景石・礫敷等は検出されていない。
- 23) 増補改訂鳥羽離宮跡1984：京都市埋蔵文化財研究所：1984
- 24) 特別史跡毛越寺跡発掘調査概報1~6：平泉町教育委員会：1978~1990
- 25) 尹武炳：韓国の古代苑池：発掘された古代の苑池：学生社、1990。諸先学の多くは、雁鴨池の造営を『三国史記』に記す文武王14(674)年の園地開削に関する記事に比定してきた。しかし尹は同記景德王19(760)年条に記す園池開削に関する記事こそが雁鴨池造営を示すものだとする。いずれをとるかににより、東院-Bは雁鴨池に倣って造営されたのか、あるいはほぼ同時期に同じ計画手法のもとに造営されたのかの違いがでてくる。
- 26) 雁鴨池発掘調査報告書：韓国文化公報部文化財管理局：1984
- 27) 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(学報44)：奈文研：1986

summary : This study is concerned with the design and composition of Toji-in Garden which was located in the south-east corner of Nara Palace.

The results of four times excavation offers five features of this garden in comparison with another ancient remains of Japanese and Korean gardens. And also I examined the position of this garden in ancient garden making in accordance with these five features.